

女子ユースダイレクターの役割

女子ユースダイレクターは2017年に北海道サッカー協会技術委員会で新たに創設された役職です。男性のユースダイレクターは5ブロックに1名ずついらっしゃいますが、女性は北海道独自で、私1名でのスタートでした。最初は何をしいのかかわからないところから始まりましたが、当時道央のユースダイレクターで現在技術委員長の上田充士さんより、女子ユースダイレクターの役割は自分で作っていいとご助言をいただき、まずは北海道の女子サッカーの現状や男子の育成に関する取組を知ること、女子ユースダイレクターという存在がいることを知ってもらうことから始めようと思い、様々な年代の試合やトレセン、会議の場に参加させていただきました。

同時期に、JFAより女子サッカー普及コーディネーターが各ブロックに配置されたこともあり、コーディネーターの方々、女子委員会、技術委員会、JFAコーチなど多くの皆様のご協力をいただきながら、北海道トレセンでの指導、女子フットボールミーティングの開催、北海道U-13(中学生)女子8人制サッカーフェスティバルの創設など、様々な取組を行ってきました。そして2021年より、男子と同じく各ブロックに女子ユースダイレクターが配置されることとなり、現在は女性5名で活動しています。この6年の間に、女子の育成、普及に関する組織や役割が整理されたこともあり、現在は各ブロックでの活動、北海道トレセンの運営・指導、女子サッカーデーの運営協力、来年度にむけたカレンダー調整など



育成に関わる人々をつなげる

を中心に行っています。

これまで6年間、自分たちの役割を模索し、様々な取組をやってみて、女子ユースダイレクターの役割は、「北海道の女子選手の育成に関わる人々をつなげること」だと思っています。各組織の役割やカテゴリーが明確化されてきた中で、組織間やカテゴリー間をつないだり、男子の育成に関わる方々とのつながりを持ち情報共有をしたりと、つなぎ役になればいい活動しています。選手にとっても、U-12からU-16、さらにはその先まで、「どこのサッカーの会場に行ってもいつも同じ人がいる」ということがちょっとした安心感につながってくれたら嬉しいと思っています。それは指導者の方々にとっても同じです。

まだまだ男子ユースダイレクターの方々と肩を並べるには足りないこともたくさんありますし、これからも活動していく中で求められる役割が変わってくることもあるかと思いますが、北海道でサッカーが女性の身近なスポーツとなること、そして北海道からなでしこJAPANで活躍する選手を育成することを目指して、多くの皆様と連携し、ご協力いただきながら進んでいきたいと思っています。

山崎 しおり

(公財)北海道サッカー協会
女子ユースダイレクター札幌担当

国民体育大会 サッカー競技少年女子 (U-16) 北海道選抜

女子サッカー普及と強化の大きな施策として、2021年度からスタートした国体少年女子。北海道では、選抜チームをつくり、トレーニングを重ねて本番に臨んでいます。北海道女子リーグやU18リーグ、U15リーグ等女子選手に関わる試合はもちろんですが、男子チームに所属している女子選手をみるために、男子の試合も含めてU16年代の試合、北海道トレセンやブロックトレセンなどを監督を中心に視察。月1回行われるキャンプに招集して本大会のメンバーを決定しています。テクニックはもちろんですが、自立・自律したたくましさ、選択肢を常に3つ以上持ってプレーでき、まわりが疲れてきたときに頑張れることも、重視しています。

トレーニングのたびに、 選手の成長を目の当たりに

スタッフは、夢の達成に向けて、北海道の女性の地位確立と選手たちの幸せを第一に考えるようにしています。「すべてのプレーを丁寧に、正確に」という共有すべきこ



だわりを定めるとともに、叱る基準も共有しました。

2023年は、月に1回トレーニングを行い、7月末にはフェスティバルに参加。直前合宿も行いました。トレーニングを重ねるたびに選手が相手を観て判断するプレーがみれ、毎回、選手の成長を感じられました。個人としてもチームとしても力をつけ、本大会に出場しましたが、様々な部分で他の地域との差を感じる結果となりました。私たち女子ユースダイレクターも選手と一緒に成長すべき課題があると感じました。

国体を通じて、私自身、藤代監督からサッカーの考え方、仕組みなどサッカーについて深く学ぶことができたと感じています。また、サッカーだけでなく、チームづくりの観点でチームマネジメントについても多くの学びがあり、今後の活動に活かしていきたいと感じました。選手とともに強い北海道を目指していきたいと思っています。



三澤 絢子

(公財)北海道サッカー協会
女子ユースダイレクター道南担当



佐藤 美幸

MICHIKO ITO

伊東 美智子

北海道シニアサッカー連盟 副理事長・事務局

伊東美智子さんは、きめ細やかな大会運営の手腕や正確な会計事務とともに、
その明るいお人柄で、
競技人口が年々増え続ける北海道シニアサッカー界を支えています。



経理経験ゼロから連盟の会計担当に

もともとは学生時代からスキーやテニスをしていて、スキーではSAJ指導員として、テニスではインストラクターとして子どもたちに指導をしていました。主人がサッカーをしていたので、息子たちもサッカーをするようになり、我が家はサッカー中心の生活。長い間家族の応援をしてきました。自分自身は友人の誘いで数年間だけ初心者のフットサルリーグに参加。息子たちが小学生のころにサッカー4級審判を取得、フットサル4級と公式記録員も取得しました。選手としてはベンチ要員でしたし、審判としても実働はほとんどありませんが、この経験が、今のシニア連盟での業務に少しは活かしているのかなと思います。

北海道シニアサッカー連盟は、北海道におけるシニアサッカーチームを統括する団体で、生涯スポーツとしてのシニアサッカーの普及振興を目的として活動しています。40歳以上・50歳以上・60歳以上・70歳以上(80



歳以上含む)の10歳単位のカテゴリーに分かれ、各カテゴリーの全国大会予選や、サッカーを楽しみ親睦を深めることが目的の全道大会の企画・運営など、サッカーとフットサルで競技志向ごとのリーグや大会を行っています。そして今後は女子のシニア年代の活動の場も広げていきたいと考えています。リーグや大会は自主運営を基本としているので、選手自らが役員となり、各種大会やリーグ戦の企画・運営や審判などを兼務しています。そのため、選手目線でお互いを尊重しあいながら良い雰囲気での活動をしています。

現在、私は、事務局長として、連盟の会計業務と主管する大会の運営業務を行っています。主人と同じチームの友人が連盟の役員をしていらして、声を掛けて頂いたことがきっかけとなりました。経理の経験も無く家計簿すら付けていない私が会計業務を任されて、最初はとても戸惑いましたが、皆さんに助けを頂きながら取組んでいます。

家族に支えられ、成長しつづける
シニアサッカーを支える

少子高齢化の中、シニアのサッカー人口は、右肩上がりに増えています。年齢別人口によるものもありますが、サッカーを生涯楽しむもうとする貪欲な姿勢とパワーにあふれる現役選手たちが、自分たちに今できることを考え、熱く議論を繰り返して、最大限にサッカー

を楽しめる環境を自ら作り出している結果だと思います。シニア人口が増えている中でも、普及に向けた取り組みにも積極的ですし、全国大会で勝っていくための努力も惜しんでいません。和気あいあいとした雰囲気ながらも、そういった姿を知っているからこそ、自分の業務にも自然と熱が入ります。女性の役員が少ないので、事業のなかでなにか女性だからこそ気付ける事があればお役にたてるかなあと思ってはいるのですが、逆に助けられていることが多いと感じることがしばしばです。年齢を重ねてもまるで少年のように楽しそうにサッカーをしている皆さんの姿を見て応援出来るのをとても楽しく感じています。ここで活動することでとてもたくさんの方とお知り合いになれましたし、その中には生涯の友人となった方もいます。この組織の居心地が良いので、今後も末永く仲間であらせて欲しいと思っています。

年々シニア年代のチームは増加しているので、更に大きな組織なと思いますが、チームが増えれば増えるほど大会数・試合数も増え、課題も増え、自身の業務量も増えていきます。それでも周りにいる皆さんとの関わりが、私の気持ちをリフレッシュさせてくれますし、気持ちを若々しくさせて貰っており、大きな原動力になっています。そして、やはり、支えになっているのは身近にいる主人の存在でしょうか。現在も主人はシニアの現役選手で、息子達も指導者・プレイヤーとしてサッカーに関わっているため、私も関わり続けたいという気持ちになります。私自身で果たしたいという大きな野望はありませんが、今後は女子のシニア年代の活動の場も広げていきたいと考えていますし、皆さんがサッカーを生涯楽しめるよう、サッカーやフットサルが出来る環境・場所を増やすため、できることをやっていきたいです。

MAYUKO WATANABE

渡邊 真結子

ノルディーア北海道 マネージャー

一度距離を置いたサッカーと向き合い、
自分自身にとってサッカーの意味を理解したと話してくださった渡邊真結子さん。

誰よりもノルディーアが好きと胸を張り、選手経験を活かして、
マネージャーとしてのスキルを磨いていらっしゃいます。

小学3年生から美園サッカースポーツ少年団でサッカーをはじめました。男の子に交じて数人の女の子が所属していましたが、3年生から卒業まで継続したのは、私だけでした。主にサイドハーフで、攻撃にも積極的に参加し、主力選手として試合に出場していました。この頃から当然のようにサッカー選手として活躍する将来を夢見ていました。

中学・高校は、札幌リンダ（現クラブフィールズ・リンダ）に。中高生と社会人が入り混じったチームだったので、学校とは異なる社会がとても新鮮に感じられました。様々な指導者の方に教わる機会もあり、選手としての

幅も広がりました。指導者のひとり、鈴木貴浩さんから「サッカーを通じて一流になる」という言葉をかけていただきました。最初はよく理解できていなかったように思いますが、生意気なサッカー少女だった私の心にとどまり、サッカーだけではだめだということ、どんな人間になっていくのかを探索していくことが大切だということ学びました。

リンダでの選手生活の中で、多くの大人の選手が、asc adooma（ノルディーア北海道の前身）に移籍したことは大きな衝撃でした。北海道から全国で戦うチームをつくることに賛同した大人たちの熱い気持ちを子どもだった私は理解できず、悔しくさえありました。もちろん、今は、そのときの大人の選手たちの気持ちがよく分かりますし、チームを作ってくくださったことを感謝しています。

理想と現実とのギャップ

高校卒業後、北海道を離れ、大原学園



JaSRA 女子サッカークラブ（現 AC 長野パルセイロ・レディース）に入団しました。すべての出来事がはじめてのことばかりで刺激だらけ。誰もがクオリティの高いサッカーをしていて、試合に出ることはもとより、練習についていくことさえ必死で、なでしこリーグにはじめて出場したときの記憶もないほどです。当時、種田監督には、厳しく指導していただき、全国リーグで戦うための責任の重さ、覚悟を教えてくださいました。試合に出ずにメンバーのサポートをする機会も多かったのですが、腐らずにチームのためにできることをしなければならぬ、という気持ちを学びました。自分が少しずつ変わっていききました。2年間の学生期間を終え、社会人として選手を1年続けたのち、福岡 J・アンクラスに移籍。自分に求められているプレーが変わっても対応できる新しい自分も見つけつつも、思うように活躍できず、サッカーを離れる選択をしました。今思えば、もっとやれるはずという気持ちと現実のギャップに悩んでいたのだと思います。

自分にはサッカーが必要だと気が付く

なでしこジャパンに沸いた2011年、サッカーから距離を置いていた私に、ノルディーア北海道の選手にと声をかけていただきました。当初は断っていましたが、サッカー選手として活躍する夢に代わる目標や熱中できるものがないことに気が付き、入団を決めまし

た。入団当時のノルディーアは、降格間際で、すでに入替戦を控えており、はじめて試合に出てから数か月後に降格を決めました。もちろん悔しくはありましたが、落ち込む気持ちが不思議なほどありませんでした。自分にとってサッカーが必要だと自覚したとたん、自分を受け入れ、良い意味で開き直ることができていました。そして、地元でサッカーをできる喜びが、やがて恩返しをしたいという気持ちに変化し、新しい目標「北海道の女子サッカーを盛り上げたい」ができました。そしてノルディーアの選手として約11年を過ごすことになりました。

引退後、現役時代から働いている職場に残りましたが、翌2023年からマネージャーとして再びノルディーア北海道に関わることを決めました。毎日が怒涛のように過ぎていき、目の前の仕事を必死でこなす日々です。そんな中でも、選手を経験しているからこそ、選手がサッカーに集中できる環境をつくりたいという思いが強く、また、誰よりもノルディーアが好きだという自負、そして、自分にとってサッカーが必要であるという思いが、忙しい日々を乗り越える原動力になりました。2023年シーズン、結果は伴わなくとも、米山監督のもと、チームは一つになって戦いました。ホームゲームにはOGが顔を出し運営を補助。目の前には全力でサポートしたいと思える選手たち。上を向くことができたシーズンでした。

今ようやく、一つのサイクルを終え、見えてくるものがありました。これから自分がどんな風になんか変わっていけるか楽しみです。サッカークラブは、フロントが整わないと強いチームになれないと思います。私自身がレベルアップして、選手にとってよりよい環境をつくっていきたいと思います。5年後も、10年後もサッカーに関わり続けていたいと思います。



CHIE HIRONAKA

廣中 千映

(一社)コンサドーレ北海道スポーツクラブ
コンサドーレサッカースクールマスター

周りに恵まれてサッカーを続けることができたからこそ、
今度は、自分自身がサッカーで恩返しをしたいという廣中さん。
子どもたち一人ひとりに寄り添って、全員がサッカーを楽しめるスクールづくりを
心がけてくださっています。

一人ひとりの思いに寄り添う

サッカーとの出会いは幼稚園の頃です。もともと、じっとしていられないタイプで、屋内で遊ぶより園庭で体を動かすことが好きな園児でしたが、父の影響で、自然とボールを蹴るようになっていきました。小学1年生から伊達西サッカー少年団に所属し、本格的にサッカーをはじめ、中学進学後は、男子チー



©2023 CONSADOLE

ムの北湘南サッカースクールと女子チームの室蘭アイスバーズの両方に所属。競技にのめりこんでいき北海道大谷室蘭高校へ進学しました。高校では大岩真由美監督から一人ひとりの思いに寄り添う姿勢を学びました。選手主導のチームづくりをされる方でしたが、選手が困っているときには選手の思いや考えに寄り添って、助言をくださいました。さらに、オフザピッチの場面で、挨拶をすること、周りへの感謝が大事だということも学びました。高校生活では、寮生が多い中、1時間かけて自宅から学校へ電車に通っていましたが、電車は1時間に1本ほどしかなく、両親に送迎してもらったこともありました。不自由なくサッカーに向き合い、多くを学べたのは、両親や指導者、そしてチームメイトのおかげです。

大学から北海道を離れ、大東文化大学女子サッカー部に入部。4年時には主将を務めました。1年の頃、前十字靱帯を断裂したことも影響し、また部員が50名いる中で、試合に出場できない日々もありました。しかし、



©2023 CONSADOLE

どんな立場であろうと、誰よりもチームのために闘い、自分にできることに一つひとつ取り組むことが、チーム力向上に繋がることを学びました。人数の多い組織の中で、チームの目標を明確にし、同じ方向を向いて闘えるよう、部員一人ひとりとコミュニケーションを取ることで、そして、それぞれの考え方を知ること大切にしたのではないかと思います。

北海道に恩返しを

大学卒業後、コンサドーレ北海道スポーツクラブの一員として、指導の現場に立っています。これまで学んできた一人ひとりの考え方を知らうとする姿勢は、今の職場でも大切にしています。サッカースクールには様々なレベル、目的をもった子どもが通っていますが、コーチという立場で、子ども一人ひとりの考えや性格を知り、全員がサッカーを楽しめるようなスクールづくりを心掛けています。最初は上手くいかないことが多かった

子が、できることが増えて嬉しそうに楽しそうにサッカーをする姿を観ることができたときは、大きなやりがいにつながっています。また、レベルアップを目指してスクールを辞めてアカデミーに所属を変えることになる子がいたときは、当然寂しい思いもありますが、その子にとって少しでも何か力になることができたのかなと感じます。

コンサドーレサッカースクールは、札幌だけではなく、旭川・士別・釧路・中標津・室蘭・恵庭・岩見沢など全道各地で開催されています。「北海道から世界へ」というコンサドーレのトップチームのスローガンとともに、「北海道にスポーツのある日常を」という社団法人としての理念を掲げた活動は全道各地に広がっています。経験豊富な指導者の先輩やプロ選手として活躍していた方もいらっしゃいますし、女性のスクールコーチも複数人おり、心強い先輩や仲間恵まれていると実感します。

これまでも、私は周りに恵まれていると感じてきました。とくに家族は、選手だったころには、どんなに遠い場所でも試合にかけつけてくれ、道外でサッカーを続ける後押しをしてくれました。周りへの感謝の気持ちが、スクールコーチとして働くことを決意した大きな理由であり、仲間や指導者の皆さん、両親、そして、北海道に、何か少しでも恩返しができるかと考えています。私たちの組織は、サッカーはもちろん、コンサドーレはカーリングチームとバドミントンチームもあります。私も、指導者として研鑽をつみながら子どもたちの声に耳を傾け、スポーツを通して一人でも多くの方を元気にしていくことで、恩返しをしたいと思っています。

KUMI NUNOKAWA

布川 久実

クラブフィールズ・リンダ コーチ
新札幌整形外科病院 手術室看護助手

長く北海道の女子サッカー界を牽引し続けているクラブフィールズ・リンダ。
選手から指導者へと立場をかえながらもリンダー筋の布川さん。
選手たちがサッカーを通じて得られる経験を強さや優しさに変えられるよう、
温かく見守っていらっしゃいます。

歴史あるクラブの選手から指導者へ

キャプテン翼の影響でサッカーに興味を持ち、社宅の子どもたちとボールを蹴り始めていましたが、女の子がサッカーチームに入ることが難しかったので、小学生のころは剣道を習い、中学ではバスケットボール部に所属していました。バスケ部の顧問の先生に一生懸命取り組み、自分も変わるし、周りの見る目も変わってくると言われたことは今でも大切にしている、現在の指導や仕事の中に活かしています。



サッカーへの関心は、高校になってからも消えず、1年生のときに担任の先生に札幌リンダを紹介してもらい、女子サッカーチームで活動ができるようになりました。

札幌のサッカーは、札幌大学の柴田先生の指導のもとでサロنفットボールを基盤に発展し、西岡女子クラブ、エイトピース、はばたけが発足。札幌リンダは、はばたけで活動していた故安田和子さんによって立ち上げられました。当時の監督は、故中村寿哉さんです。1992年に全道優勝し、全国大会に出場した初戦で九州代表 3-2 で逆転勝利しました。これが全日本女子大会での北海道代表としての初勝利でした。その後、ほくでんスポーツフィールズとの合同チームを経て、2005年からクラブフィールズ・リンダと名前を改め、2010年には、全日本 U-15 女子サッカー選手権で3位入賞を果たしています。現在も、北海道内のトップリーグである北海道女子サッカーリーグ（皇后杯予選）に参戦しながらも、U-15、U-18 のリーグ戦にも参加



し、U-15（中学生）年代の受け皿として早くからその役割を果たしています。熊谷紗希選手もかつてリンダに所属していました。多くの人に支えられてきた歴史のあるチームを誇りに思っています。

私自身、長らくリンダの選手として活動する中で、指導にも関心を持ちはじめ、現役の頃から指導者の道に進みたいとチームスタッフに伝えており、引退後、コーチに就任しました。自分がこのチームの出身選手であるため、選手のために貢献したいと思う気持ちは強いと思います。コーチとしての指導が主ですが、男性スタッフには話せないような、何でも話せるような選手に近い存在でいられるように心がけています。練習や試合での勝ち負けを経験しながら、選手が日々、人としてもサッカー選手としても成長していく姿を見ることがやりがいとなっています。

選手には、様々な経験を
強さや優しさに変えてほしい

選手のときも指導者としても、たくさんの仲間ができ、はげましお互いを高めあえることができています。もちろん、辛い経験もありましたし、辞めたいと思ったこともあります。それでも仲間に支えてもらい、アドバイスをいただく中で、角度を変えたものの見

方に気づかせてもらえ、自分自身が辛さと真正面から向き合い、克服していくことができました。両親や仲間たち、友人、そして選手たちが私の支えになっていると感じます。

指導者は専任ではなく、普段は、整形外科手術室の看護助手として勤務しています。手術が円滑に進むよう、事前準備が必要ですし、先生、看護師、患者様が困っていないか、常に目くばり・気くばり・心くばりの連続です。まわりの状況をよくみることは指導者にもつながるところもあり、この経験が活かされていると感じます。職場の皆さんも、サッカーに関わることを前向きにとらえてくださっており、ときに支えてくださっています。

北海道は冬が長く屋外でサッカーができる期間が短いことや広域性への課題もあり、本州と比較して環境要因で後れをとることがありますが、北海道全体で知恵をしぼり、ベストのやり方を考えて、普及・強化とも向上していければと思います。私も、リンダの一員として、自分にできることを精いっぱいやっていきたいと思っています。少しずつ歴史が積みあがってきているクラブですので、卒団性が様々な分野で活躍しており、今後何かしらのネットワークができて、チームに活かせたらと思っています。卒団性たちが指導者やスタッフとして活動できるようなサポートもしていきたいです。

選手は、良いことも悪いことも経験していくと思いますが、その経験が自分を上げていくし、強さや優しさになっていくと思います。自分を大切にしながら、様々な経験をしたいと願っています。私自身、年齢や体力的に厳しくはなっているのですが、サッカーもフットサルも日々変化し、進歩していているので、本を読んだり、講習会に参加して指導者としてレベルアップし、選手に還元したいと思っています。

IKUMI KUROSE

黒瀬 育美

北照高等学校女子サッカー部 顧問

競技経験がないとは思えないほど、

指導者としても審判としても大車輪で活動されている黒瀬さん。

今や北照高等学校の顧問としてだけでなく、小樽地区、U-18リーグ運営に

欠くことのできない存在です。

部活動のすばらしさを伝えるために
保健体育教員に

ももとの専門競技は小学生の頃から続けているソフトテニスで、学生時代は全国中体連、インターハイ、インカレなど各カテゴリーで全国大会に北海道代表として出場経験があります。私の人生の中で、部活動における経験はものすごく大きく、部活動から多くを学びました。保健体育の先生を目指したのも、中学の頃のソフトテニスの顧問だった体育の先生がきっかけです。中学や高校スポーツに対する思いが強く、北照高等学校に大学新卒で保健体育科に採用していただいたとき、スポーツコースで唯一の女子部である女子サッカー部に携わりたいと、学校と監督にお願いしました。

北照高等学校女子サッカー部は2012年に発足し、監督の立野先生と初心者なたった一人の部員から始まり、創部12年を数えます。この12年間のうち11人でプレーできた年は少なく、少ない人数だからこそ指導者と選手の



信頼関係を厚く築くことができました。特に立野監督の熱い指導が選手たちの心を掴み、人数が少なくても最後まで諦めずに頑張ってくれた選手たちのおかげで現在のチームへと繋がっています。監督、私の2名体制ですが、日頃から沢山の方々が本校女子サッカー部を応援して下さい、ご厚意で足を運んでくださる外部指導コーチもいらっしゃいます。

最初は遠征時等の女子選手のお手伝いからはじめ、サッカーは保健体育科の教員を目指して勉強した程度しか知識の無かった私でしたが、周りの方々に支えていただき、公認C級コーチ、3級審判員、ライフキネティックチームトレーナーと資格取得の機会をいただきました。審判や指導者資格取得を通じて出会った方々のおかげで、日常のトレーニングから実践して学ぶことができたため、自分なりにサッカーへの関わり方を見つけ出すこともできました。今では、ウォーミングアップやフィジカルトレーニング等のボールトレーニング以外の部分を任せてもらっています。

選手に接するときには、日常から遠征等も含めて、女性同士だからできる選手との関わりを一番に心がけています。別の競技だったからこそ見えた新しい発見があり、自分の価値観や視点を変えた考え方ができるようになったことも強みとして指導に活かしたいと考えています。挨拶、言葉遣い、礼儀作法、気配りや思いやりの心など、サッカーを通じ

てサッカーを取っても魅力的な人を目指した指導を目指しています。プレイヤーとしてスポーツに全力を注げる期間はあっという間に過ぎます。周りにはいろんな楽しいことがありますが、今しか出来ないこと、目指せない事を大切に過ごしてほしいと願っています。

チーム自体が原動力になり、
成長させてくれる

今や、北照高等学校女子サッカー部というチーム自体が私の原動力です。監督、コーチ、卒業生や保護者も含め、チームが苦しい時は一緒に戦い、イベントは全力で楽しみ、私も一緒に仲間に入れて支え合ってくれた選手がいたからこそここまで続けることができました。そして、サッカーを何も知らない私が色々なことに挑戦したいと思えるよう環境を作ってくださっている北海道の女子サッカー界の皆さまを尊敬し心から感謝をしています。今まで関わることがなかった女子サッカーを通じて、新しく出会えた方々がいることは、私を成長させてくれています。

いつか、サッカーの競技経験ないの?!と驚かれるくらい、指導もできて、審判もできて、ボールも蹴れて、体育の先生としても女子サッカーのコーチとしてもストイックな姿を見せて、将来もずっとサッカーを続けていたいと思う選手が一人でも増えてくれる、そういった存在になりたいです。そして、北海道優勝、全国大会出場にふさわしいチームへとレベルアップしていけるように、選手や監督の手助けができるよう努力したいです。北照でサッカーがしたいと思って来てくれた選手を全力で可愛がり、サポート役として日本一を目指したいです。

SHIGEKO KAJINO

梶野 滋子

(一社)北海道フットサル連盟 常務理事・女子委員会委員

北海道Corrida・de・Toros.L選手

セントラルフィットネスクラブ24東苗穂勤務

フットサルはご自身の生きがいという梶野滋子さん。

フットサルが女性の生涯スポーツになるために、
常に前向きに、選手にも運営にも、挑戦を続けていらっしゃいます。

高校でサッカーに会う

小学1年生から水泳をはじめ、5年生からは選手コースで朝は週2回、夜は週5回と練習漬けの日々でした。中学に入ってからバレーボール部に所属。サッカーとの出会いは、高校生でした。入学してすぐに、札幌明清高等学校女子サッカー部の2年生に声をかけられました。先輩によると、輝いていた、とのこと。その言葉に従って入部しました。先輩の言葉が正しかったのか、2年次には副キャプテンを3年時にはキャプテンを務めるまでに至りました。

高校卒業後、住み慣れた北海道を離れ、埼玉県の武蔵丘短期大学女子サッカー部に入部しました。当時、札幌明清高校の女子サッカー部で道外へ挑戦した選手はまだおらず、当時の監督に初だと言われました。関東の大学での挑戦は、大きな経験となりました。一つ上の「桃さん」という先輩の上手さに衝撃を受けました。卒業後にサッカーから離れてしまったのですが、辞めていなければ代表選手になれたのではないかなと思うほどでした。私自身はサッカー中心の生活を送り、関東大学女子サッカーリーグではベストイレブンとなり、関東大学女子選抜にも選ばれました。また、宴会部長としてチームを盛り上げることに全力を出し切りました。

大学卒業後に北海道に戻り、社会人チームの札幌第一レディースに所属し、大阪なみはや国体時に北海道選抜として戦いました。その後、24歳でサッカーを辞めましたが、10年後の34歳で友人にフットサルに誘われ、現在の活動につながっています。怪我に悩ま



されながらの活動ではありますが、無理をしないと決めてフットサル選手を継続しています。とにかくたくしく、すでに生きがいになっているかもしれません。若い子ともふれあったりすることで元気をもらっています。

運営へのチャレンジ

エンジョイチームに参加しているときに、北海道フットサル連盟の荃津副会長に声をかけていただき、運営に関わるようになりました。その年の自分のテーマが「頼まれごととは試されごと」と決めていたこともあり、チャレンジすることになりました。

現在は、北海道フットサル連盟の常務理事として、女子委員として活動しています。また、北海道女子フットサルリーグの副委員長として、1部・2部の対戦表を作成したり、試合当日の運営を担当しています。女性は、結婚、出産、育児、などでフットサルから離れたくなくとも離れていってしまう選手が本当に多くいると思います。そういう選手でも続けていけるようなリーグに出来たらと思い、リーグが円滑に進むよう、サポートに努めています。1年間のリーグを無事に終わらせたときには安堵するとともにやりがいを感じます。

北海道フットサル連盟の役員の方々は、男性女性関係なく仲が良いと思います。優しく頼りがいもあります。まだまだ、知識不足の私ですが、何かあるたびに相談にのってもらっ

ています。とくに、荃津副会長には何度も助けられました。知識も豊富で勉強家でちょっぴりお茶目な方ですが、北海道の女子フットサルの環境がよりよくなるよう、ものすごく考えていらっしゃいます。女子の普及のための北海道エスクエラプログラムも荃津さんのご尽力で実現しました。

夫の協力、職場の後押し

フットサル連盟の役割を担うために、夫の協力が大きな助けになっています。家で作業をしていても悩んでいると手伝おうかと声をかけてくれます。夫の協力なしには続けることができなかったと思います。また、職場である東苗穂店の乾店長、風間副店長をはじめ、職場の皆さんが、連盟の活動を好意的に見守ってくださっていることにも後押しされています。また、職場では、子供から高齢者まで、色々な年齢層の方が元気で身体を動かして生き生きしている姿を目の当たりにし、運動の素晴らしさを実感します。フットサルも、女性が歳を重ねてもやり続けられるスポーツになるよう、環境づくりに貢献していけたらと思います。

北海道のフットサル人口はまだまだ少ない状況ですが、色々な方々にフットサルの魅力も感じて頂きたいので、是非一度北海道女子フットサルリーグやエンジョイリーグなどに足を運んでいただきたいです。



フットサルの取り組み エスクエラプログラム

育成年代へのアプローチ 「学校」という名のプログラム

女性にとっては、屋内で5人で行う競技の特性が、はじめやすさや継続のしやすさにつながり、北海道では多くの女性の社会人フットサルチームが活動しています。一方で、育成年代に特化した取り組みが課題となっていました。冬の長い北海道では、サッカーのチームが、10月ごろからフットサルに活動の場を変えることから、普及が進みつつあるU-15年代のサッカーチームからも、U-15年代単独での試合経験を積ませたいという声が高まっていました。そこで、10月から翌3月にかけて行う「NADESHIKO リーグ」にU-15年代のリーグ戦を行うこととなりました。

しかしながら、直後にコロナ禍に突入し、様々な活動がストップする事態となりました。しかしこの時間を必要な事業を見つめなおし、よりよい事業に向けた思考する期間と捉え、事業を再考しました。その結果、誕生した事業がエスクエラプログラムです。エスク



エラとは、「学校」を意味しています。授業だけではなく学校祭やクラブ活動など、様々な経験ができる「学校」のように、育成年代の女子選手たちが、フットサルに関する大会やクリニック、フェスティバルに参加できるプログラムとして構成しています。

チーム事情に配慮した 柔軟な参加要件

プログラムは、U-12、U-15、U-18、U-23のカテゴリーを設けました。それぞれに、会場費のねん出が課題ではありますが、totoの助成金の枠組みを使って展開することができています。初年度、実際に展開してみると、このプログラムの柔軟な点が、かえって分かりづらさを生んでしまったこともありました。たとえば、U-15年代の参加要件には、U-12の優れた選手が参加できたり、1名だけオーバーエイジ枠を設けるなどしている点に疑問が寄せられることもありました。しかしながら、普及と育成を兼ねたこのプログラムの意図が徐々に浸透していていると感じています。

女の子の競技継続のために

今後は、このプログラムの枠組みを拡大させ、一つのパッケージとして全道各地のフットサル仲間の力を借りて、取り組みを進めたいと考えています。すでに今年度は、釧路で実施しましたが、来年度も協力していただ



る地区が決定しています。

中学生に入ると女の子はサッカーを継続しなくなってしまうという課題はまだ残っています。エスクエラプログラムを通じてU-15年代での競技継続につながることも大きな目的の一つです。

真剣勝負も学ぶことも、楽しむことも大切にし、この「学校」が女の子がボールを蹴る楽しさをずっと持ち続けることに貢献できればと思っています。

荃津 都

(公財) 北海道サッカー協会 理事
(一社) 北海道フットサル連盟 副会長



日本女子フットサルリーグ エスポラダ北海道イルネーヴェ

私たちエスポラダ北海道イルネーヴェは、クラブ理念である『道産子の夢をのせて』を掲げ、日本女子フットサルリーグで戦っています。

北海道の女子選手たちが長くフットボールとして活躍できる場所を作るために2016年に発足され、子供たちの憧れや目標となるような魅力あるチームを目指し日々努力しています。北海道から全国へ、そして世界へ羽ばたく選手が生まれること、選手として輝く可能性を広げることが、私たちがトップリーグに属している意義だと感じています。

イルネーヴェの選手たちは、年齢も幅広く個性溢れる選手たちです。試合で実力を発揮するためにも、日々の積み重ねを大切に、常に充実感を求めて練習に励んでいます。現時点ではまだ、全国のトップには手が届いていませんが、着実に歩み階段を登っているはずです。北海道のフットボールを女子フットサルからも盛り上げていきたいと思います。

菅野 大祐

エスポラダ北海道イルネーヴェ
監督



札幌ブロックの取り組み



選手の活動の場を充実させたい

札幌地区・ブロックでの普及活動として、様々な活動を行っています。

札幌地区サッカー協会では、各事業サッカーをすでにやっている選手はもちろん、

登録をしていない選手や初心者でも気軽に始められやすいように、カテゴリーを分けて、それぞれに合ったレベルを各自で選ぶことが出来るように工夫をしたり、どこで活動しているのか分からない方には、インスタグラムやXなどを利用して情報提供を行っています。

普及コーディネーターとしては、札幌地区サッカー協会や各種別・各カテゴリーとの連携をとりながら、女子に関わるスタッフや指導者の育成も視野に入れ、中学生年代までがメインにはなっていますが、選手達の活動の場を充実したもの出来るようにしていきたいと思っています。

■ガールズスクール札幌ブロック

5月～2月/月1回(土曜日)/16時～18時

会場：SSAP屋内競技場

対象：小学生対象

■札幌ガールズサッカーランド（JFAなでしこひろば）

不定期開催

会場：主にSSAP・札幌大学体育館など

対象：幼稚園～中学生

札幌大学女子サッカー部ヴィスタにご協力いただき、ヴィスタの選手が指導にあたります。

■JFAレディース/ガールズフフェスティバル

年1回/夏期開催

会場：SSAP天然芝



対象：5歳以上

■SFA U15レディース・U12ガールズ交流会

年1回

会場：札幌市内

対象：小学6年生・女子チームに所属していない中学生と札幌地区所属のU15女子チーム

保護者の皆様へは、U15女子チームの紹介や中学生に上がる際の登録などの情報をご提供しています。

中村 麻衣

普及コーディネーター
札幌ブロック担当



道央ブロックの取り組み

選手の活動を充実させたい

道央ブロックは空知・千歳・北空知・小樽の4地区から構成されています。

道央ブロックの女子チームは小樽2チーム・空知1チーム・千歳1チームで4チームしかいないため、他のブロックとの交流が多いのが現状です。

■女子トレセンと女子サッカースクールの共同開催

毎週月曜日(年間)

4年生～6年生のトレセンと1年生～3年生のサッカースクールを北照高校さんのご協力をいただき、体育館をお借りして開催しています。

■倶知安でのサッカースクール

月1～2回(冬季間11月～4月)

豪雪地帯でもあるので、冬季間の選手や保護者の移動の負担を減らすために、倶知安小学校の体育館をお借りして、倶知安・ニセコ・岩内等の選手を対象に1年生～6年生

U-12年代に関しては各地区ともトレセン活動が積極的に行われて、その他にもガールズサッカースクールを活用した取り組みや、なてしこ広場・各地区で行われているスクール等で沢山の小学生が活動していて、各地区の担当者の方々のご協力もあり女子選手の活動の場が増えてきています。

を対象にしたサッカースクールを開催しています。

■JFAレディースサッカーフェスティバル

年1回開催

今年度はフットサルで行い、札幌・室蘭・千歳・小樽のチームが集まり交流会を行いました。

■小樽地区女子フェスティバル

年1回開催

毎年4月に開催して、室蘭・旭川・札幌・岩見沢等、遠方から沢山のチームが参加してくれています。



梶原 康裕

普及コーディネーター
道央ブロック担当

道南ブロックの取り組み



様々な年代の選手へのアプローチを

道南ブロックには、渡島、檜山、胆振、日高管内の36の市町村の中に高校とクラブチーム合わせて7チームしかありません。そのため色々なチームとの対戦の機会が少ないです。又、リーグ化によって大会も減り、対戦や交流の機会が少なくなっています。18歳以下の選手は、トレセン活動や全道大会がありますが、それ以上の年代の選手は日々、チームで練習をしても女子との試合の機会が少なくモチベーションの維持も難しいものがあります。女子サッカーを支え繋いでいく年代の選手たちへのアプローチも重要だと考えています。このようなゲーム環境の中、各地区協会の女子委員会や女子チームが中心となって、交流会やフェスティバルが行われています。

各地区協会の工夫と努力

室蘭地区では、サッカーやフットサルの大会を行っており、その中でも「MFL KOSEI CORPORATION Ladies Cup」は道

内の16チームが参加し、選手も約300名が参加して行われました。この大会は、距離が遠かったりしてなかなか対戦できないチームと試合のできる貴重な機会となっています。また、「室蘭市女子フットサル選手権」や「函館地区フットサルフェスティバル」などでは、小学生と一般が同じ会場で大会が行われ、サッカーを続けていける環境があることを知らせる機会にもなっています。小学生以下対象に苫小牧地区ではなでしこ広場やキッズスクールが行われ、小学生対象に、室蘭地区では、今年度から「アイスバーズスクール」も行われています。函館地区では、小学生の保護者に向けて市内の中学生がどのような環境でサッカーをしているのかを知らせる説明会を実施し、情報提供をしています。中学生以上を対象に登録、未登録に関わらず集まって試合ができる環境「WE-GAME」の日を月1回設けています。

各地区協会の協力と様々な工夫によって、サッカーの登録数が全体的に減少している中、女子が大きく減少せず横ばいの状況が維持できているのだと思います。



浅利 清美
普及コーディネーター
道南ブロック担当

道東ブロックの取り組み

広大な地域で地区同士が協力しよう

道東ブロックは、十勝・オホーツク・根室・釧路の4地区協会が構成され、管轄する面積としては北海道の約4割を占める広大な地域です。当ブロック下では、U-15女子カテゴリでは4チーム（十勝2、オホーツク・根室合同1、釧路1）、U-18女子カテゴリでは3チーム（全て十勝）が、北海道サッカー協会主催大会に参加しています。十勝地区では女子サッカーリーグが開催されており、また各地区には社会人を対象としたチーム（カテゴリ）もあり、サッカー・フットサルが盛んな地域の一つと言えます。

4地区全てにおいて、毎年JFAレディース・ガールズサッカーフェスティバルが実施されていることから、コロナ禍前は開催期日を意図的にずらして相互に参加し合っ

ていました。現在、U-15・U-18の道リーグがスタートしていることから日程が過密でスケジュール調整が難しい状況ですが、今後も4地区が連携して多様な試合環境を整えていく必要性を強く感じています。

私は普及コーディネーターとして道東を担当していますが、各地区で行われている様々な取組を道東4地区で共有する橋渡しくらいしかできていません。一方で、数年前に設立された『道東圏サッカー協会』では役員の皆さんが女子サッカーに非常に関心が高く、普及コーディネーターの存在も早い段階で認知していただいております。多くの可能性を感じており、各地区女子委員長と協議して具体的な取組や改善に繋げていきたいところです。当面の課題は、女子サッカー未経験者が年齢を問わず気軽に参加でき、継続していけるような取組を行っていくことだと考えています。

今年度初めて道東圏サッカー協会の女子事業として「道東レディース・ガールズフットサルフェスティバル2023inオホーツク」を11月23日（木・祝）に北海道立北見体育センターにて開催しました。数年前のジョイントミーティングで話題にあがった『道東の女子サッカー選手が一堂に会する場を創出したい。』という思いが、オホーツク地区協会女子委員長の藤森さんを中心にした多くの皆さんのご尽力により実現しました。残念ながら、インフルエンザ等の流行によ



りガールズの部は急遽中止になりましたが、レディースの部では4地区から複数チームを編成して参加し、総計8チームで熱戦を繰り広げました。次年度以降も、継続予定です。



春名 健司
普及コーディネーター
道東ブロック担当

道北ブロックの取り組み



最北の地から女子サッカーを ～小さな芽から大きな大輪へ～

道北ブロックは、北は稚内から南は占冠、西は増毛までという広範囲の地域です。このような広範囲の中で、旭川市以外の市

町村における女子選手数が非常に少ないというのが今までの現状でした。しかしここ最近、4年生以下の各カテゴリーの大会やフェスティバルに参加している旭川以外のチームに女子選手の姿が多く見られるようになってきました。つまり、町村での各チームの構成上、女子選手の必要性が高まってきているということです。道北地域のこのような現状の中、女子選手が一人でもいれば、その子が継続していけるよう、また、そこから選手を増やしていけるよう、身近な生活圏でのサッカー環境を整備していくことが大事だと考えています。

毎週木曜日は『女子だけDay』&冬期間の『華リーグ』 ～旭川地区サッカー協会女子委員会の取り組み～

4月～10月の毎週木曜日は、女子だけでサッカーをする『女子だけDay』です。17:00～19:00までは小1～小6の「ガールズ広場」、18:30～21:00までは中学生と2つある高校女子サッカー部の「トレセン広場」が、東光スポーツ公園人工芝グラウンドで行われています。唯一女子だけでサッカーができる場とあって、平日の夜にもかかわらず、遠く美深、下川、名寄、羽幌からの参加選手も現れました。片道100kmちかくの移動距離を運転する保護者の皆様に感謝です。さて、この取り組みによって、下級生は上級生からサッカーだけでなくあいさつなど生活習慣の大切さ「off the pitch」の姿勢を学び、上級生は見本になる意識を持つことで積極性や責任感が身につきました。

11月～3月の冬期間は月2回程度、集まっ



た小学生をチーム分けてゲーム漬けの「華リーグ」を行っています。

今後、女子サッカーの活動をさらに推し進めるために、幼稚園・小学低学年の層を増やしていくこと、高校卒業後の選手たちのサッカー環境を整備していくことにも目を向けて活動して行こうと考えています。

鈴木 康宏

普及コーディネーター
道北ブロック担当

北海道U-13(中学生)女子8人制サッカーフェスティバル

中学生年代への競技継続のために

U-13女子8人制フェスティバルは、中学生になってもサッカーを続けていきっかけになるよう、中学1年生の女の子たちが同世代の選手たちと交流を図ることを目的として2019年からスタートしました。毎年、4月上旬、全道各地の中学1年生の女子選手が札幌に集い、地区毎のチーム同士で対戦します。

このフェスティバルに参加した選手たちが、今では、U-15リーグや道リーグ、そして、2022年度に創設された国体少年女子の部で活躍しています。

普及コーディネーターが アイデアを出し合う

フェスティバルの運営は、普及コーディネーターが中心に行っています。5ブロックの担当者がアイデアを出し合い、試合以外にも様々な企画を実施しています。2日間開催ではありますが、遠方からの参加者に考慮して1日だけの参加を可能としたり、



地区単位で参加できない選手のために、合同チームを用意するなど、できるだけ多くの選手が参加できるよう工夫しています。

また、審判委員会のご協力を得て女性ユース審判の実技研修会の場としても活用していただくなど、審判の育成にもつながっています。

コロナ禍で一時参加者は減少しましたが、2023年度は100名以上の参加者があり、競技継続の後押しにつながっているものと考えます。



U-12 (小学生) 年代



小学生年代の活動を
多くのスタッフが支えています。

小学生年代には、地域の少年団やクラブチームで、男の子と女の子が同じチームでトレーニングを行い、大会に参加します。男子と一緒に活動し、将来のレベルアップにつながる土台がつけられます。

一方で、各地域で女の子だけで参加できるサッカースクールや練習会、「なでしこひろば」が開催されていますし、女の子だけで活動しているチームもあります。また、2011年のワールドカップドイツ大会で優

勝したなでしこジャパン優勝に貢献した北海道出身の2選手の名前を冠した「JFA U-12ガールズゲーム北海道 熊谷・高瀬杯サッカー大会」など、女子選手だけの大会も開催されています。大会の運営には、4種委員会のスタッフの皆さまに多大なるご貢献をいただいています。個人参加を受け付けるなど、女の子がサッカーをはじめきっかけもつくってくださっています。

また、各地区主催の女子トレセン活動(選抜選手の練習会)では、優秀な指導者のもと、レベルアップがはかられています。



第4種ともいわれるこの年代は、北海道では男女一緒に活動する(MIXという区分)チームが多く、求めるスキルに大きな違いはありません。その中で、ガールズたちが身近な地域で集まれるよう、HKFAでは「ガールズサッカースクール」の開催を支援してきました。また、近年では各地区や女子チームが連携協力して、フェスティバル等の開催を通してガールズが光り輝くような場を創出しています。私自身、指導場面

では選手が自ら考え判断してプレーできるよう、視覚的手段を活用して分かりやすく情報を提示するなど、そのトレーニングやゲームでの目標やねらいを共有することに努めています。

関わる方々がベストサポーターとなり、ガールズが常に笑顔でプレーできる環境づくりを皆さんと共に進めていきたいと思えます。

横澤 基

(公財)北海道サッカー協会
女子委員(U-12担当)・4種委員



キッズ

ボールに触れるはじめての一歩

サッカーボールに触れる最初の機会をつくり、サッカーを楽しいてくれる子どもたちを増やす取り組みが全道各地で行われています。キッズ年代は、女の子も男の子も一緒になってサッカーを楽しみます。

本誌でご紹介している苫小牧地区の黒澤さんのご活動のように、幼稚園への巡回指導はキッズ事業の大きな柱の一つです。また、子どもたちのことを理解する大人をより多く増やすために、キッズリーダー講習会を実施されています。

そして、子どもたちがボールを蹴ってゴールに入れることを楽しめるフェスティバルの開催が、各地区で工夫をこらしながら行われています。

全道規模では、毎年、「JFA ユニクロサッカーキッズ in 北海道」を開催しています。2023年度は、1,000人を超える子どもたちが札幌ドームに集まり、広い会場を走り回りました。キッズ委員会の皆さんが中心となって運営し、他の種別のスタッフも協力しながら大会を盛り立てています。保護者様に向けて、女子委員会では、リーフレット『女の子のためのサッカーガイド』を配布し、女の子がサッカーを続けるためのヒントをご提供しています。



キッズの活動の中では、サッカーをすることや体を動かすことが「楽しい」と感じられる経験につながるようなプログラムの提供やスタッフの関わりを心がけています。また、子どもたち自身が「考える」ことも大切にしています。自ら遊びや動きを創造し活動することも楽しさの一つです。こうした楽しかった経験は、確実に次へ、そして未来へつながっていきます。(一社)札幌地区サッカー協会で開催している「サッカー

キッズ大集合」には、その「楽しさ」を求めてリピーターさんや常連さんも多く参加しています。また、中にはたくさんの「サッカーガールズ」もいます。これからも、一人一人が自分の力に合わせて「楽しさ」を実感できる場を提供し続けていきたいと思っています。まずは、その「楽しさ」を経験させるところからスタートしてみませんか。

佐賀 主昌

(公財)北海道サッカー協会
常務理事
(一社)札幌地区サッカー協会
常務理事・キッズ委員長



JFA女子サッカーデー

女性が輝く社会に向けて北海道協会にできること

サッカーを通じて女性が輝く社会を目指し、JFAが掲げる「なでしこビジョン」。その実現に向けて、国連が定める「国際女性デー」と同じ3月8日が「JFA女子サッカーデー」と定められました。女性活躍に向けて、JFAとWEリーグが共同で女性のエンパワーメント原則に署名・参加し、女性リーダーシップ研修の実施や女性登用の推進と見える化などが進められる中、全国の地域協会でもその展開を期待され、2020年度から北海道でも取り組みを開始しました。女性活躍やジェンダー平等という社会課

題に、サッカー界が先んじて歩みを進めようとするJFA女子サッカーデー事業を推進するにあたり、北海道協会は、女子サッカーの価値を多くの方に知っていただくことを大きな方針としました。選手にサッカーを続けたいと思ってもらえるように、指導者や審判員、運営スタッフなど、サッカーに関わる様々な方法を知っていただけるように、そして、北海道の女性がサッカーを当たり前のように楽しめる社会になるための下地をつくることを目指して事業に取り組んでいます。

北海道のフットボールを支える女性たち

事業開始初年度はコロナ禍にあり、イベント実施が困難であったことから、『北海道のフットボールを支える女性たち』の第一弾を作成。JFA監修『サッカー × キャリア × 未来』に想を得たものです。選手の身近な存在である指導者や審判員、運営スタッフなど、サッカーに関わり続けるヒントを得られるように、あわせて、女性たちを通して、北海道の現状を分かりやすく伝えることを目指しました。

イベント開催

2021年度は、WEリーグに焦点をあてたオンラインイベント『WEリーグ元年、女子サッカーの未来 私たちの将来を考える』を開催。JFAの今井氏とWEリーグの小林氏を迎え、WEリーグが目指す女性活躍の姿をご講演いただくとともに、北海道出身のWEリーグ選手からのメッセージ動画を

流したり、小樽出身で現アルビレックス新潟レディースの山谷選手とオンラインでつながりました。翌年はハイブリッド講演会として『リスペクトと歩む女子サッカー～女性活躍の未来、北海道女子サッカーの未来～』を開催。WEリーグ初代チェアの岡島氏とJFA今井氏から女性がスポーツをすることの意義を語っていただきました。いずれのイベントも選手たちの心に響き、日本や世界で活躍される方々の生の声に大きな刺激を受けた様子を理解することができました。今後も、北海道の女性の視野を広げる取り組みにも力を入れたいと考えます。



JFA 女子サッカーデー

本冊子は、JFA 女子サッカー事業の一環として製作しております。

この度は「PASS TO THE FUTURE」の第2弾を手に取り、最後までお読みいただきまして、誠にありがとうございます。第1弾の作成においては、全国各地の多くの皆様にご好評をいただき、其のことが北海道の女子サッカー関係者においては大変励みとなりました。第1弾は、21名のロールモデルとなる方々に登場していただきましたが、第2弾はロールモデルとなる方々と、そこから、パスがしっかりとつながれてきた17名の方が登場しております。

この冊子は、身近で活躍する皆さんが、どのように女子サッカーに関わってきたか、そして、現在の取り組みについてお聞きしていますが、それぞれの活躍は、女性活躍のヒントになっています。サッカーを通して、出会いがあり、目指す目標ができ、やりがいを見つけ、成長する。その過程には、仲間や家族の支えがあり、それに対する感謝の気持ちが溢れていました。女子サッカーに関わるそれぞれの人のストーリーは、個人の「思い」が、「行動」となり、それが「拡大」し、現在の活躍につながっていると思います。「行動」へと一歩踏み出す時には、とても勇気がいることですが、そこには必ず「仲間」が存在し、その人を支えてくれている。そんな、構図がそれぞれの皆さんのストーリーから読み取ることができました。その、「思い」の中には、感謝の気持ちや、恩返しの気持ちがあること。よい経験を次の世代につないでいくことが女子サッカーの発展にもつながると感じました。また、身近な人の活躍が、次の人へ繋がっていく環境がスポーツにはあるのではないかと思います。スポーツの影響力は、いろいろな意味で大きいものと再認識しました。

今回は、普及大会、U-12年代、キッズ、シニア年代、フットサル、JFAなどでしこ普及コーディネーター、北海道女子ユースダイレクターにもお話を聞いていますが、それぞれが、各年代や各地域の課題に合わせてしっかり場の提供をしていること。そして、女子サッカーをサポートする男性も多く存在しています。普及COや女子ユースダイレクターは、この広い北海道を5ブロックごとの地域を繋ぐ役割をしっかりと担うことができていることに感謝します。

女子サッカーの普及・発展の取り組みは、JFAと共にやってきたものであり、この北海道ではHKFA女子委員会を中心として、15地区サッカー協会の女子委員会をはじめ、特に普及に関わる、キッズ、4種、3種、フットサル、シニアの女子サッカーに関わる方たちがしっかりと場を作り、北海道に女子サッカーを根付かせるために努力してきたことがよくわかりました。

女性活躍という言葉を聞くと、まだまだ、一歩引いてしまう女性も多いと思いますが、私は、この冊子を読んでいただくことで、今ある「思い」を行動にすることが活躍の一步なのではないかと思っています。ただと、そのハードルが低くなり、一歩踏み出してもらえるものになることを期待しています。

北海道には女子サッカーに関わるサッカー協会役員、選手、監督、コーチ、審判員、技術委員、普及に関わる素晴らしい方々に支えられていることを、改めて心に刻みました。

最後に、この冊子の作成にあたり、原稿を提供していただいた皆様、及び（公財）北海道サッカー協会女子委員会の皆様に感謝を申し上げます。

（公財）北海道サッカー協会
副会長

鷺津 裕美

まずは、『北海道のフットボールを支える女性たち』第2弾が完成したことに大きな喜びを感じています。ここに登場される方、冊子製作にご尽力いただいた皆さまに感謝を伝えたいと思います。北海道には、サッカーやフットサルの活動を支えてくださる素敵な女性がいること、そして、女性活躍社会に向けてそれぞれの組織の中で貢献されている女性がいることを誇らしく思いました。

読み進めるうちに、すべての女性たちに共通するキーワードは「人との出会い」ではないかと感じました。多くの女性たちが、仲間・家族・恩師という言葉をあげており、ご自身のターニングポイントで、誰かの後押しや影響を受けて、サッカーと出会い、続けることを選択し、さらには恩返しをしたいと思うようになったのではないのでしょうか。自分がサッカーを楽しむ気持ちはもちろん大切にされているとは思いますが、誰かのために何かをしたいという思いが「支える」ことにつながっていったのではないかと思います。温かい気持ちになりました。

また、三澤絢子さん、鈴木まなみさん、廣中千映さんとは、彼女たちが室蘭大谷高校女子サッカー部の選手であった頃、私自身が監督という立場に関わることができた皆さんですが、この冊子で違う形で再会できたことには、感慨深いものがあります。別々の場所で活躍されていますが、学び共感できたことをそれぞれの形で自分に落とし込んでいって、成長を続けていることを頼もしく思いました。北海道の女子1級をつなげてくれた大村美詞さんが、国際審判員になりたいと、語ってくださっていることは、審判員の仲間としてとても嬉しいコメントでした。この冊子を通じて新しい一面を、新しい素敵な人たちを知ることができました。

女性たちの紹介だけでなく、第2弾からは事業紹介が加わりましたが、長くチームや地域に携わっていらっしゃる方の顔ぶれを拝見し、皆さんに感謝するとともに、この冊子に掲載されていない方にも、審判、指導者、運営スタッフとしてサッカーやフットサルを支えてくださっている方の存在を思いました。

この冊子を通じて、北海道でフットボールを支えてくれている女性の仲間たちがいることを多くの方に知ってもらいたいと思います。そして、第3弾、4弾と続いていくように、さらに素敵な仲間を増やして、北海道の歴史をつないでいきたいと思います。

（公財）北海道サッカー協会
副会長

大岩 真由美

PASS TO THE FUTURE

編集後記

北海道のサッカー・フットサルの道を切り拓き、支えてきた女性の経験を若い選手たちにつないでいければと思います、コロナ禍の2021年3月、本冊子の第一弾を発行しました。身近な女性指導者、審判員、運営スタッフをより深く知る機会となり、女子サッカーを取り巻く環境、地域や種別の状況などを理解する手立てとなったとの声を頂戴し、こんな女性もがんばっているよ、もっとこんなことを掲載したらよいのではとアイデアも寄せていただきました。手にとって読み込むことのできる冊子という形に「残していく」ことの意味と責任を認識しました。

第二弾となった本冊子では、頂いたアイデアを受けて、女性の皆さまを紹介するとともに、女子サッカーの事業や大会を紹介させていただきました。道内のサッカー・フットサル環境とあわせて、多くの人々の思いを感じていただければと思います。

本冊子の製作にあたり、メールや対面、Web会議システム等を通じてご取材をさせていただき原稿を作成しましたが、できあがった誌面を見て、よく書いてもらってしまった、自分はたいしたことはやっていないのに、との声をいただくこともありました。ご紹介させていただいた皆さまが積み重ねてきた一つひとつの選択や行動が、着実に道内のサッカー・フットサルの歩みを進めているものと思い、感謝を込めて編集したことをここに記します。

文章や画像を提供いただいた皆さま、ご取材に応じてくださった皆さま、お忙しい中ご協力をいただきありがとうございます。また、第一弾に続き製作にご尽力いただきました札幌大同印刷(株)の皆さま、事業全体の事務手続きを担ってくださった北海道協会事務局の皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。

選手の成長を願う思いの強さと、フェアでしなやかなリーダーシップをお持ちの中川女子委員長に心からの信頼と感謝を込めて

(公財)北海道サッカー協会
女子委員会 副委員長

橋本 美湖



皆さんの未来につながりますように





PASS TO THE FUTURE
[北 海 道 の フ ッ ト ボ ー ル を 支 え る 女 性 た ち]



発行日：2024年3月8日

発行：公益財団法人 北海道サッカー協会

〒062-0912 札幌市豊平区水車町5丁目5-41 北海道フットボールセンター TEL 011-825-1100 FAX 011-825-1101

URL <https://www.hfa-dream.or.jp>

監修：公益財団法人 北海道サッカー協会 女子委員会

※本誌の記事・写真・図表・ロゴマークなどの無断転用を禁じます。 ※本誌に掲載されている所属・役職等は2024年3月時点のものです。